

## 贈嶺上老人

嶺上老人に贈る 蘇軾

建中靖国元年（一一〇一）一月四日、六十六歳 大庾嶺で作る。

鶴骨霜髻心已灰 鶴骨かつこつ 霜髻そうぜん 心すでに 已ひに灰ゆ青松合抱手親栽 青松ごうほう 合抱みずか 手う 親みずから栽う問翁大庾嶺頭住 翁おうに問うう 大庾嶺頭だいゆれいとうに住すみて曾見南遷幾個回 曾かつて 南遷なんせん 幾個いくこか回かえるを見たる

【語釈】・心已灰：荘子の齊物論に「心は固り死灰の如くなら使む可きか」・嶺：いわゆる五嶺の一つで、江西省大庾県の南にある。梅花で名高く、梅嶺とも呼ばれる。東坡が惠州へむかう途上ここを越えたのは、紹聖元年（一一〇九四）五十九歳 九月であった。

## 【解釈】

私は鶴のようにやせ衰え、髭は霜のように白くなり、心もとうに活力を失ってしまった。ここの一抱えもある青い松の木は、かつて南方流謫の途上、自ら植えたものなのだ。大庾嶺にお住まいのご老人よ、これまで大庾嶺を越えて南へ流された人のうち、いったい生きて帰れたの何人見ましたか。

老いた東坡にとって南方僻遠の地における七年間は実に長かったことであろう。その思いは、承句の「青松合抱 手親ら栽う」という誇張表現を用いなければ到底言い尽くせるものではなかった。

『独醒雑話』によると東坡が大庾嶺まで来て茶店で休んでいると、一老翁が出てきて、従者に「あの方はどなたか」と尋ねる。従者が「蘇尚書（東坡の前官職）です」と答えると、老人は前へ進みお辞儀をして、「あなた様はひどい目にお会いになったが、今日こうして北へ帰れるのは、天の助けを受けた善人だからです」と言った、と。大庾嶺を越えれば、その先は江南の地。冬のさ中、ここまでたどり着いたのだと、東坡はホッと一息ついたことであろう。

東坡一〇〇選 石川忠久より抄出